

日本人の創作讃美歌について

——明治三十六年版『さんびか』論——

辻 橋 三 郎

(一)

日本の讃美歌史の時代区分について、先学の二説がある。海老沢有道氏は、明治七年諸歌集出現までを第一期、明治二十一年、『新撰讃美歌』刊行までを第二期準備時代、明治三十六年『さんびか』出版までを第三期各派協力建設時代以降を第四期現代としておられる。⁽¹⁾ 笹淵友一氏は、明治一三、四年以前を、創成期ともいふべき第一期、一五年から三五年までを成熟期ともいふ第二期、三六年以降、現代までを、「一応の完成期と見」ることができる第三期としておられる。その所以は、「従来個人または教派の手によって編纂された讃美歌集がプロテスタント各派協力によるものとなったといふ編纂方式の上だけでなく讃美歌そのものの上でもある到達点に辿りついたといふ感がある⁽²⁾」からというのである。

二氏の見解は、明治三十六年一月に出版された、各教派協力の結晶である『さんびか』が、日本における讃美歌の「一応の完成」であるという点において一致しているとみてよからう。筆者は、そうした意味をもつ、明治三十六年版『さんびか』を中心として、日本人創作の讃美歌の特質を考察し、日本人のキリスト教受容の性格把握の一助ともし

たいと思う。

(二)

明治三十六年版『さんびか』とともに讃美歌史上においてピークとなる讃美歌集は、明治二十一年五月刊の、日本一致基督教会と組合教会協同の『新撰讃美歌』、昭和六年二月刊の、明治三十六年版同様プロテスタント五大教派（組合、日基、バプテスト、メソヂスト、基督）協力『讃美歌』、昭和二十九年二月刊の、日本基督教団発行の現行『讃美歌』であることは、縷説の要はあるまい。さらに、明治三十六年版の委員会は、『さんびか』にもれたものの蒐集をも兼ねて、家庭用、日曜学校用の讃美歌集として、明治四二年二月、『さんびか 第二編』を完成刊行、三十六年版を『さんびか 第一編』と呼ぶこととした。この『さんびか 第二編』以来、歌詞の作者名が明記され今日に至っている。三十六年版『さんびか』の時点では、外国人の作者名は明記されているが、日本人の場合は、単に original としてあるだけで、固有名詞はあげられていない。もともと二年の『新撰讃美歌』では内外ともに作詞者の姓名は全く記されていないかった。この時点ではみなそうであったことは、例えば『基督教聖歌集』（明一七、明二八、明三三、メソヂスト派）『基督教讃美歌』（明治二二、明二九、バプテスト派）も同様であった。讃美歌が信仰共同体の所有という性格から導びき出された現象——当時の信者の意識の反映——の一つといえよう。

それが三十六年版（以後この呼称を用いる）に至って、外国人作者の場合は明記し、日本人創作歌は original としたことにについて、三十六年版編者の中心メンバーの一人たる別所梅之助は次のように述べている。

「然しいろいろ存念もあつて、第一編には、誰の作といふ事を記さなかつた。先輩の作にしても、誰のと定めがたいものもあり、それと知り得ても随分筆を加へたから、その人の名はしるしておいてよいか、どうか分らなくもあつた⁽³⁾」。

讃美歌が信仰共同体の信仰歌という性格上、時代の要請で、後人によって加筆修正されるのは、讃美歌の、いわば宿命のようなものであった。そのような必然によって、斧鉞の加わっていることから、別所たちは作者名をあえて付記せず、*original* という日本人創作の徴表だけにとどめたことが、別所のいう「存念」であったようである。今日、それらのうち、作者名の判明したものも少なくないが、筆者は、その固有名詞よりも、明治日本のキリスト者——信仰共同体の作品として、それら *original* の作品について考えてみたいと思う。

三六年版では、*original* 即ち日本人の手になる讃美歌は五四編であったが、そのうち三八篇が、昭和六年版にも採用されている。現行昭和二九年版に至っては、さらに減少して二三編の残存となっている。その原因としては、笹渕氏の言葉を借りると、「英米の讃美歌に比較して、信仰詩としての不満の点が少なく⁽⁴⁾」なく、「明治三十六年版『さんびか』は花鳥風月趣味の自然感情に近づき過ぎて信仰詩としての性格を逸脱してゐるものがあり⁽⁵⁾」、したがって当時から批判されていたからとのことである。その減少を、三六年版、昭和六年版、昭和二九年版の編成（目次）のなかで辿ってみる。説明の便宜上、昭和二九年版の目次のタイトルを基準にして、比較対照表を作ってみる。

礼 拝（昭和29. 昭和6. 明治36）

昭 和 29		昭 和 6		明 治 36	
讃 美					
朝		朝		朝	
昼		昼			
夕		夕		夕	
主 の 日		主 の 日		主 の 日	1
主 の 家	1	主 の 家	1	主 の 家	1
開 会		開 会		開会 閉会	
閉 会		閉 会			
計	1		1		2

教 会（29. 6） 戦闘の教会（36）

昭 和 29		昭 和 6		明 治 36	
教 会		教 会		教 会	
バプテスマ		バプテスマ		バ プ テ ス マ	1
聖 餐 式		聖 餐		聖 餐	
宣 教 者	1	宣 教 者	1	宣 教 者	1
		献 げ 物		信 施	
伝 道		伝 道		伝 道	
神 の 国		神 の 国			
定 礎 式		定 礎 式	1	（定礎式「雑」より）	1
献 堂 式	2	献 堂 式	2	（献堂式「雑」より）	4
按 手 礼		按 手 礼		（按手礼「雑」より）	
計	3		4		7

（注）明治36における（定礎式「雑」より）などとあるのは、36年版では、「雑」の項目にあるものを、比較表作製のため移したもののという意味。

信仰の生活（29）信徒の生涯（6・36）

昭和 29		昭和 6		明治 36	
神の招き		警醒招致	1	警醒招致	1
悔 改	1	悔改告白	3	悔改告白	3
救 贖	1	贖 罪	1	（贖罪、別項より）	3
信 仰		信 仰		信 仰	
信 頼	1	信 頼		信 頼	1
祈 禱		祈 禱	1	祈 禱	1
向 上	1	精 進	1	精 進	1
聖 潔		聖 潔		聖 潔	
霊の戦い		霊 の 戦	1	霊の戦い	1
勤 勞		勤 勞		勤 勉	
霊の交り	1	霊 の 交	1	霊 の 交	1
服 従		服 従		服 従	
節 制		節 制	1	節 制	1
奉 仕		奉 仕			
試 鍊	1	疾病艱難	1	疾病艱難	1
		交 誼	1	交際一致	2
年末年始		新 年		新年歳晚（「雑」より）	
		歳 晚			
		感 謝			
母 国	1	祖 国	3	（国歌「雑」より）	3
国際精神		国際精神			
世界平和		世界平和			
収穫感謝		収 穫		（収穫感謝「雑」より）	
誕 生 日					
結 婚 式	1	結 婚	2	（結婚「雑」より）	2
家 庭	1	家 庭	3	（家庭「雑」より）	3
母 の 日		母 の 日			
友愛親睦（「信徒の生涯交際一致」より）	1	親 睦 会		（親睦会「雑」より）	5
送別旅行	1	送 別 会	2	（送別会「雑」より）	2
		旅 行		（旅行「雑」より）	2
学 校	1				
青年（「送別会」より）		青 年			
児 童		小 児 （「聖父慈愛」より）	1		
計			23		33

（注）昭和29、昭和6の項の、（「信徒の生涯交際一致」より）など
とあるのは、明治36年版よりの意味。

神 (29) 聖父聖子聖霊 (6 . 36)

昭 和 29		昭 和 6		明 治 36	
三 一 の 神		三 一 の 神		三 一 の 神	
父 な る 神 大 能		聖父大能稜威		聖父大能稜威	
父 な る 神 慈 愛	1	聖父摂理慈愛	1	聖父摂理慈愛	2
主イエス・キリスト待降	1				
		聖 子 降 臨	2	聖 子 降 臨	
主イエス・キリスト降誕				聖 子 降 誕	1
				聖 子 顕 現	1
主イエス・キリスト生涯					
		聖 子 模 範		聖 子 模 範	1
主イエス・キリスト苦難		聖 子 苦 難	1	聖 子 苦 難	2
主イエス・キリスト復活		聖 子 復 活		聖 子 復 活	
主イエス・キリスト昇天		聖 子 昇 天		聖 子 昇 天	
主イエス・キリスト統御		聖 子 統 御		聖 子 統 御	
主イエス・キリスト再臨		聖 子 再 臨		聖子再臨審判	
主イエス・キリスト審判					
聖 書	1	聖 書	1	聖 霊	1
		聖 霊		聖 霊 聖 書	1
計	3		5		9

永生（29． 6 ）勝利の教会（36）

昭 和 29		昭 和 6		明 治 36	
死		死	1	死	1
天 国		天 国		天 国	
葬 式	1	葬 式	1	(埋葬「雑」より)	1
計	1		2		2

雑（29． 6． 36）

昭 和 29		昭 和 6		明 治 36	
雑 (「聖父摂理慈愛 より」)	3	悔 改 (「聖父摂理慈愛」 より)	1		
(「信徒の生涯 悔改告白」より)		交 誼 (「交誼」より)	2		
(「特撰信徒の生涯 交際一致」より)		(「特撰信徒の生涯 交際一致」より)		特撰信徒の生涯 交際一致	1
計	3		3		1

合 計

昭 和 29		昭 和 6		明 治 36	
礼 拝	1		1		2
神	3		5		9
教 会	3		4		7
信仰の生活	12		23		33
永 生	1		2		2
雑	3		3		1
計	23		38		54
全讃美歌	459		565		538
他に頌歌	6	他 に 頌	6	他 に 頌 栄	5
讃 詠	17	讃 詠	24	讃 詠	23
		聖 歌 隊 用	9		

以上を通観してみると、明治三十六年版の場合、original 即ち日本人創作讃美歌は、総数の約一〇分の一であったけれども、昭和六年版では、『さんびか』採用分の踏襲は、全体の約一五分の一に、昭和二九年版では、二〇分の一に激減している。各部門の減少の比率も、その総数の比率に比例して減少しているのである。減少の理由は、前述したごとく信仰歌としての不備と評価されてのことであろう。信仰歌としての不備如何については本論として後述することにしたい。

さて、明治三十六年版、昭和六年版、昭和二九年版の目次の比較を通じて、顕著な事実として、次のようなことがあげられる。もつとも、讃美歌編纂に当り、英米の讃美歌に範がとられたであろうことはいうまでもない。また、日本人編纂者たちの念頭には歌集の伝統的部立もあつたに違いないと思うが、筆者はそれらを採用した段階における編纂者の思惟について考察を進めたいと思う。

(1) 三十六年版では、「贖罪」が、「礼拝」「神」同様に、大項目としてあげられている。

(2) 三十六年版では、昭和六年版、昭和二九年版における大項目「教会」「永生」が、「戦闘の教会」「勝利の教会」となっている。

(3) 三十六年版では、昭和二九年版の大項目「信仰の生活」が「信徒の生涯」というタイトルで、教義的側面の強い信仰生活に関する小項目に限定されている。したがって、信仰生活の外延ともいふべき私生活、キリスト教会、あるいは信者でなくとも行なう行事、儀礼は「雑」の部に一括されているのである。

(4) 三十六年版には、「特撰」という大項目があり、それが、「礼拝」「教会」「神」等の大項目の拾遺のような役割を果し、そのなかで、さらに「主の日」「三一の神」「信仰」などの小項目によってくくられているのである。この拾遺という語の意味は、そのテーマの歌詞としては、その内容が稀薄であると認定され、といって一擲できないものということである。さて、この形式は、昭和六年版に引き継がれて、六年版の「雑」の部門となっている。ついでな

がら、昭和二九年版の「雑」についてふれておくと、ここでは、前二版のような歌詞におけるテーマの内容の濃淡による分類は、一切しりぞけられて、どの項目にも所属させられない讃美歌のみ、即ち文字通り「雑」の部門にしかくりこめないもののみが収録されて、すっきりした形式となっている。

次に、三六年版『さんびか』の歌詞の内容についての問題点を指摘しておきたい。

(1) 第一に注目されることは、「悔改告白」「贖罪」といった風の、従来の日本人の伝統的な信仰生活に縁遠い、あるいは全く無縁の項目所属の讃美歌が、それぞれ三編ずつあるということである。

(2) 第二に、「献堂式」四編、「国歌」三編、「家庭」三編、「親睦会」五編、などといったように、日本人の伝統的な生活感覚にすんなりと受容できるテーマの讃美歌が、比較的多いことである。

この二つを、三六年版の『さんびか』の詞章の顕著な特徴とみることができよう。この細説は後述することにして、先ず、編成における問題点から検討を進めたい。

(三)

(1) 「贖罪」が大項目としてあげられている事は、『新撰讃美歌』などの時点でもなかったことである。『新撰讃美歌』では、「拯救」という大項目の中に、「贖ひ」「十字架上の贖」「贖の喜び」という小項目があった。したがって、三六年版で、これを大項目としたことは、主な三六年版編者たち——日本人としては、別所梅之助、湯谷磋一郎、三輪源造、外国人としては、T・M・マクネヤ、G・オルチン——の見識であったと思われる。⁽⁶⁾ 湯所、マクネヤは、日本基督教教会系であり、三輪、オルチンは、組合教会系、そして、別所はメソジスト系であった。⁽⁷⁾ 『さんびか』編纂に、最大の努力を払い、その主導権を発揮していたのはマクネヤであった。したがって、マクネヤの発言に、三六年版における、「贖罪」を大項目として新設した第一原因があったことと推測されるのである。そのマクネヤは、

湯谷とともに、日基派に所属していた。したがって、「贖罪」を大項目としたことは、マクネヤを中心とした日基系の編者たちの強い主張があったものと思われる。このことを裏づける根拠として、編纂主要五人物の所属する当時の三派の信仰の強調点の相違をあげてみたいと思う。

多年の宿願たる組合教会との合同の成りなかつた日本一致基督教会は、明治二三年一二月、第六回大会を開き、二四年一月をもって、教派名を日本基督教会とすると共に、教会憲法、規則、信条の改正を行なつた。その際、「使徒信条」の前文として「信仰の告白」を添加し、その冒頭において贖罪を強調したのであつた。即ち、「我等が神と崇むる主耶穌基督は神の独子にして、人類の爲め其罪の救の爲に人となり我等が罪の爲に完全き犠牲を献げ玉へり。凡そ信仰に依て之と一体となるものは赦されて義とせられ基督に於ける信仰と愛に依り作用はたらきて人の心を清む(以下略)」とあるのである。教会としては当然の事ながら、この贖罪重視の姿勢が大項目設定に大きく作用したものとみてよからう。

次に、組合教会の場合はどうであつたか。組合派には、その姿勢を内外に宣言としたといわれる熊本バンド「奉教趣旨書」の系譜をひく「奈良宣言」(明治二八年一〇月、第一回組合教会教師会、組合教会教役者大会において発表されたもの)というものがあるが、そのなかでは、贖罪についての強調言及はなかつた。

「我儕耶穌基督を救主と尊信し、神の召を蒙れる者、大いに時勢に慨する処あり。是に南都に会して天父に祈願し、聖霊の恩化に浴し、遂に左の綱領に従ひて福音を宣伝し、神の国を建設せんことを期す。

一、罪惡を悔改め基督によりて天父に帰順すべき事 一、人は皆神の子なれば互に愛憐の大義を全ふすべき事 一、一夫一婦の倫を保ちて家庭を潔め、父子兄弟の道を尽すべき事 一、国家を振興し、人類の幸福を増進すべき事 一、永生の望は信と義とによりて完ふせらる事」⁽⁹⁾

即ち、組合教会系の伝道者にとつては、悔改と基督とが、キリスト教信仰における第一義的教義として強調されていたことを読みとり得るように思われる。日基系の信者と組合系の信仰者との重視した教義内容が、「贖罪」

と「悔改」とであつたということが、それらを主題とした original、即ち日本人創作の讃美歌を、それぞれ三編もあるという事実をもたらしたものと考えていいのではなからうか。

一方、メソジスト派はどうであつたか。メソジスト派における日本人指導者、本多庸一の発言は、明治メソジスト教会の基本的姿勢を示すものと考えてよからう。『本多庸一先生遺稿』⁽¹⁰⁾掲載の「日本メソヂスト教会の指導」という一編の冒頭にある「日本メソヂスト大試験」という一文(明33・11)は、先づ、「先づ神の国と其の義とを、求めよ」(マタイ六章二三節)という聖句を掲げ、以下、次のような文章が続いているのである。

「天国本位なり、個人の幸福を次にして、神意の行はるる即ち宇宙帝国主義を重んずべし。天国確立すれば、其の細胞たる個人の安全は求めずして得らるべし。而して天国拡張の順序は個人を救ふにありといへども、畢意するに個人の為にするを第二として、天国の拡張を第一義とすべきなり。」

即ち、メソジスト派においても、組合派同様、天国、換言すれば神の国の確立、拡大が、最も強調されていたのである。

要するに、三六年版目次編成に当って、「贖罪」という大項目の設定において、マクネヤ、湯谷など日基系の信仰と発言とが、有力な働きを果していたと読みとつてよからうと思う。同時に、それが、他の編者たちに肯定賛同されたところに、明治キリスト者の、異国の宗教であつたキリスト教の教義に対する、深刻にして清新な感動、強烈にして新鮮な関心——異国の新しい教えによる変革への待望の心——をうかがい得るといえるのではないかと思う。

(四)

(2)次に昭和八年版、現行版讃美歌の大項目、「教会」「永生」が「戦闘の教会」「勝利の教会」と題されている問題である。さて、この「戦闘」という用語には、筆者は一時期の英米における用語例の模倣とみるよりも、日本人編者

たちの、ひいては明治期キリスト者たちの神の国建設のための伝道という戦いの思想が、背景にあったように思われてならないのである。さきにあげた、組合教会派の、明治二八年一〇月の奈良宣言の冒頭文を思い起してほしい。そこには「耶蘇基督を救主と尊信し、神の召を蒙」った者として、「大いに時勢に慨」し、「福音を宣伝し、神の国を建設しよう」という意志の表明があるのである。一方、先に示したメソジスト派の本多発言をも想起して欲しい。そこには組合教会にも劣らぬひたすらなる神の国建設の情熱を読みとり得るのである。とすれば「戦闘の教会」というタイトルには、組合派の三輪ら、ならびにソメジスト派の別所らの意見がかなり強く反映しているとみていいのではないかと思うが、どうであろうか。といっても、そうした熱烈な伝道と神の国建設との意志は、ひとり組合派、メソジスト派のみならず、精神的な新日本建設を意図翹望していた明治キリスト者一般のそれであったことも否定できない。筆者はそうした傾向を、一層促進した教派を組合派メソジスト派とみることから、組合派メソジスト派の信仰と発言に、その原点をみたいのである。

「勝利の教会」という呼称は、「戦闘の教会」という信仰に基く発想に対応したものであつたろうと考えてよからう。伝道と神の国建設の努力の最終の到達点という意味で、適当な対応の発想と思われるからである。

(五)

次に、(3)、即ち、現行版においてならば、「信仰の生活」と題されている部門に所属する讃美歌群が、三六年版では、二分されていて、その一半が、「信徒の生涯」というタイトルになっており、比較的教義的側面の濃い信仰生活を主題とした性格の歌群が収載されていて、一方、残る一半が、私生活的なもの、あるいは、キリスト教会及び信者の場合でなくとも行なわれる行事、儀礼的なものを主題とした讃美歌群となっていて、それが「雑」という部門の歌群となっているという問題である。これらのことがらの意味を、以下において考察してみたい。

日本最初のキリスト教会としては、明治五年二月創立の横浜公会があげられることは常識となっている。この教会が超教派を目標としていたこともあって、その信仰諸則は、新教各派共通の教義、綱領を抜粋した万国福音同盟会の信条九ヶ条に則っていた。したがって、日本におけるその後の新教各教派の信仰簡条は大体これに準拠していた。

三六年版『さんびか』もこの信仰諸則の制約内にあった。というのは、この信仰諸則に列挙されていることがらをテーマとした讃美歌が、「礼拝」「聖父聖子聖霊」（現行版の「神」）「戦闘の教会」（現行版の「教会」）「贖罪」という四つの大項目のなかに包含されているのである。そして、信仰簡条の内容とはなっていないものの、教義的側面の明瞭な信仰生活を主題とした讃美歌群が、「信徒の生涯」という大項目の歌群となっているのである。こうした信仰簡条に立脚した分類が、私生活、行事、儀礼といった風の、いわば信仰生活の外延とでも称すべき諸側面をテーマにした讃美歌群を、「雑」なるタイトルの大項目における歌群としたのであった。以上の信仰簡条主義とでもいべき分類法のなかに、儒教思想を基盤としてもっていた、明治初期キリスト者の厳格主義、形式主義の痕跡を見出すのである。参考のために、横浜公会の「信仰諸則」を記しておく。

「一、聖書は神霊の示す所又権能と其信すべき事を充実せる事。二、聖書を読み且伝ふるとき自己の決心に任ずべきは正理なる事又務むべき事。三、神は唯一にして三位なる事。四、始祖の原罪に因て人皆罪を犯す者となる事。五、神の子肉体となりて降生し人類の罪を贖ひ、又中保となりて信者を天父に顯はし、又之が為に祈り且公会の首となりて之を統一する事。六、罪人は唯信に由て救を受け義とせらる、事。七、罪人を更生し、之を清潔に帰せしむるは聖霊の感能に由れる事。八、靈魂の死せざること、身体の復活すること及我儕の主耶蘇キリストは世界を審判し、並に義者に永福を与へ惡者に永刑を与ふる事。九、キリストの司職は神の設立する事。又洗礼と聖晩餐の式は公会の大札にして永く守るべき事。」⁽¹¹⁾

(六)

四三六年版に、「特撰」という大項目があり、それが、「礼拝」「神」「教会」等々の大項目の拾遺であることは、どのような意味を担っているかとみるべきであらうか。

これは聖歌隊用とみることが、編者の意図に副ったものとみるべきかも知れない。⁽¹²⁾しかし、筆者は、昭和六年版、現行版との、歌詞を含めての総合的視点から、次のような私見を提起したのである。即ち、この「特撰」的な讃美歌、即ち「礼拝」「聖父聖子聖霊」（＝「神」）、「戦闘の教会」（＝「教会」）等の大項目に包含するには主題性の脆弱な讃美歌が、昭和六年版では「雑」という大項目に一括された、そして、その六年版では、三六年版の「雑」の内容であつた信者の私生活、キリスト教的特色の淡い行事、儀礼風のものが、「信徒の生涯」という大項目に送りこまれたのではなからうかということである。そして、これらから「雑」というタイトルへの、編者の意識の変動を看取できるのである。すなわち、明治三六年版の段階の編者たち、換言すれば、明治期のキリスト者たちの場合、信仰の生活においても、公的なものと私的なものとが分類されており、信仰簡条的な主題に公的なキリスト者の信仰生活をみていたように思われるのである。そして、ここに公的なものがキリスト者の生活として第一義的なものという価値判断が前提としてあつたことを読みとつていいのではないかと思う。そうした明治キリスト者の内部に生き続けた公的優先の価値意識は、明治キリスト者のキリスト教受容地盤であつた儒教思想の残痕であつたとみてよからう。もちろん、信仰生活を公私に二分できるといふ意識それ自体、儒教思想に基づく形式主義のもたらした未熟な観念主義であつたことはいふまでもない。ともあれ、そのような価値意識も大正時代というデモクラシーの時代を通過することによって、次第に消滅していった。その讃美歌史上に現われた現象の一つが、目次編成における「雑」の内容の変化であつた。かくて、昭和六年版における「雑」は、教義的テーマの表現度の弱い讃美歌群の場として位置づけられたのであつた。それはきびしい選別を随伴し、

この傾向は、現行版に至って一層決定的となり、「雑」の大項目に所屬する歌数は極度に減少した。

要するに、三十六年版『さんびか』における「特撰」という部立にも、明治期キリスト者の意識の一端―信仰の内容の側面をうかがい知ることができるように思われるのである。

(七)

ここで、漸く、いわば小論の本論ともいふべき三十六年版『さんびか』の詞章検討の場に辿り着いた訳である。

前述したごとく、三十六年版における日本人の創作讃美歌の特徴は、(1)伝統的な日本人の宗教意識に最も縁遠い、したがって最も新奇に思われる教義を主題としたものと、(2)日本人の生活感覚に抵抗なく受容される生活の側面を主題としたものが量的に多数であるということである。以下、この二つの性格の讃美歌群から、代表的なものとして幾つかを選び出し、それらについて点検を試みてみたいと思う。

(1)「贖罪」という大項目には、全体で二三編の讃美歌が収載されている。昭和六年版、二九年版においては「小項目」となっているのみならず、何れも、九編にとどまっているのに対して圧倒的に多い。ここにも、編者たちによって代表される明治キリスト者の、キリスト教の教義に対する、新鮮深刻な感動と関心との存在を十分に察知させるものがある。そのなかで、original 即ち日本人創作讃美歌が三編もあることは、そのことをさらに裏づけるものといつてよからう。

(贖罪 一七四番) 昭和六年版では二二一番、現行二九年版では二二七番として、何れも、「教会 伝道」の項に掲載されている。作者欄には、昭和六年版では『基督教聖歌集』、現行版では永井あい子と明記されているが、『新撰讃美歌』にも一一五番「拯救生命の水」という部門に掲載されているものである。昭和六年版も現行版も、仮名が漢字に直されたり、句読点がつけられたりしているだけで、歌詞には全く手がつけられていない。ということとは、後の

編者たちが、信仰歌として修正すべき程の欠点を見出さなかったことを意味しているとみてよからう。現行版讃美歌の解説書『讃美歌略解』には、「彼女の二七、八歳の作であり、当時の新体詩の影響が認められる」とある。原拠となっている聖句は、「我予ふる水を飲む者は永遠かはく事なし」(ヨハネ伝四章一四節)と指示されている。この聖句は、イエスの与える水は永遠の生命に至る水、無限の恵みの水であるということであって、それはイエスは霊において、常に私たちのところにおられるという喜びの湧き溢れている文章とみてよからう。この歌詞について、宗教学者戸田義雄氏は次のようにいつておられる。「『ながくかわきしわがたましいも』潤う、というようなところはキリスト教的かもしれないが、しかしその水を『くみていのちにかえりけり』というところは、日本の若水信仰、水によるよみがえりの信仰がうかがえると言えまいか。』⁽¹⁶⁾というのである。蓋し至言というべきで、端的に言えば神道思想の残滓ともいわれていいものが詞章にあるということなのである。筆者はその他、三節の「そそげいのちの ましみずを」というところにも水によつて洗い清められるという神道思想―みそぎの思想―のあとをみるのである。そのような神道思想らしいものの混入は、作者の意識的なものではなく、作者のなみなみならぬ古典への教養の然らしめたものとみてよからうと思う。その他、自由な古語歌語の駆使による流麗な調への創造も、その古典への深い素養に基いている。要するにこの歌は、伝統的な思想とキリスト教信仰とが見事に混和され、それが伝統的なリズムによつてうたいあげられた、風土性、叙情的文学性の濃厚な典型的な日本の讃美歌であった。それにも拘らず、それが「贖罪」の部門に位置させられているところに、筆者は明治キリスト者の贖罪理解を読みとるのである。参考のために全歌詞をかかげておく。

あまつましみ ながれて／あまねし世をぞ うるほせる／ながくかわきし わがたましひも／くみていのちに
かへりけり (一節)

あまつましみず のむまに／かわきをしらぬ 身となりぬ／つきぬめぐみは こゝろのうちに／いづみとなりて
わきあふる (二節)

あまつましみづ うけずして／つみに枯れたる ひと草の／さかえの花は いかでさくべき／そ、げいのちのま
しみづを (三節)

(贖罪 一八二番) 初出は『新撰讃美歌』の一五五番で、「信徒生活 耶穌ともに在す」というタイトルの部門に
属していた。それが三六年版では「贖罪」の項に移されているのだが、適当な処置とは思われない。それもあってか、
昭和六年版以後は採用されていない。先ず、歌詞を記しておく。

生れこしより つながれし／つみのともづな たちきりて／うきよのなぎさ はなれゆく／すくひのふねぞ いさ
ぎよき／(折返) げにも深き哉 あまつ大神の／すくひのめぐみは (一節)
めぐみの風の 吹くがま、／まほをあぐれば ときのまに／あまつみくにの かのきしも／はやちかづける ここ
ちして／(折返略) (二節)

舟をおほへる なみかぜも／たゞひとことに したがはせ／しづめたまひし エスキミは／いまもともにぞ いま
しける (折返略) (三節)

主はわがふねの 長なれば／あだなみたちて さわぐとも／こゝろしづかに うたひつ、／ふるさとさして かへ
りゆかん (折返略) (四節)

笹渕友一氏は、この讃美歌が『新撰讃美歌』の段階で、北村透谷の『蓬来曲別篇慈航湖』に影響を与えていること
を指摘しておられるのは、まことに慧眼といふべきであろう。さらに、笹渕氏はこの讃美歌は、「つみのともづな」
をたちきることが、「すくひのふね」の前提となつて、いるという点で、信仰的立場を逸脱してはいないが、「かのき
し」「すくひのふね」などの觀念が仏教的未來觀によつて、いることをも見落しておられない。(18) したがって、この「か

のきし」とか「ふるさと」という日本的叙情性を象徴する用語をもって「神の国」を示しているところなど、この讃美歌が「贖罪」なるタイトルに似つかわしいものでないことは、もはや喋々の要はあるまい。さらに、歌にもられている意味は、要するに、神によって原罪から解放されて「神の国」に救済されたということであるが、その救済の契機は十字架におけるイエス・キリストの死でなく、「すくひのふね」即ち仏教用語の「弘誓の船」によっているので、その船には贖いの意味は毛頭ない。ということとは、この讃美歌を「贖罪」の項に転移させたことに問題があるのであり、それは、別所、湯谷、三輪という中心的編者グループの誤謬であつたといつてよからうと思う。必然的に付記されている聖句も、「我爾曹に勸む爾曹召されし召に符ひて行はんことを」。(エペソ書四章一節、口語訳「へ主にある囚人であるわたしは、あなたがたに勧める。あなたがたが召されたその召しにふさわしく歩き……」)とこのこと、讃美歌には、やや近くても、「贖罪」という部門のそれとしては全く適合しない。この聖句は、口語訳によつても理解されるように「主にある囚人」すなわち「真の自由を」得た「エペソ書」の筆者たるパウロが、「主にある」共同生活をもとにして、主の究極目標のために「召された」者らしく前進しようという勧誘の言葉なのである。⁽¹⁹⁾このことを他の角度から考察してみよう。

『新撰讃美歌』と三十六年版『さんびか』との字句の相違は、先ず、三十六年版では、「折返し」が付加されていることである。その他、二節の「真帆あげて」(新撰)が「吹くがま、」に、「はしりゆけば」が「まほをあぐれば」に、「こ、ちせり」が「こ、ちして」に、三節の「耶蘇きみは」が「エスキミは」に、四節の「耶蘇はわれらと」もなれば、が、「主はわがふねの長なれば」に、「かへるなり」が「かへりゆかん」になっていることである。この修正も、文学的効果に力点がおかれていること、時代による用語の変化のあつたこと(耶蘇がイエスに)などを読みとることができると、そのみで、「贖罪」の意味賦与に何らの貢献をも果していないのである。「折返し」も同様、「贖罪」なる意味添加には全く無力なつけ足しに過ぎない。

以上のように、讃美歌も聖句も「贖罪」なるタイトルには適当しないものを、あえてここに転置したところには中心的編者たる別所、湯谷、三輪といった明治キリスト者の、「贖罪」なる教義への関心の強さ、深さを読みとつてよからうと思う。同時に、彼ら明治キリスト者の浅薄な教義理解の程度といふものを物語るよき一例として、この讃美歌の処置の仕方を取りあげることができのではなからうかと思う。

(贖罪 一八四番) 『新撰讃美歌』が初出で、「拯救 悔改め」の項の一二一番の歌である。これも、昭和六年版以降は削られている。はじめに歌詞を示しておこう。

くらきにねむる つみびとも／あまつひかりに てらされて／いぶせきゆめも いまはさめ／うれしき身とぞ なりにける (一節)

めぐみのつゆの 置きわたす／みそらよりふく あまつかぜ／こゝろのちりも はらはれて／きよけき身とぞ なりにける (二節)

かみのまさみち しらずして／やみちたどりし つみびとも／悔いてかへれる あしたこそ／うつらぬ日かげ あふぐなれ (三節)

初出との差違は、二、三節が甚しい。次に、その『新撰讃美歌』の詞章を記しておく。傍線部分は表現を異にしている部分である。

あまつみそのに ふきおこる／きよきみたまの かぜにこそ／こゝろのくもり ふきはれて／きよけき身とは なりにけれ (二節)

かみのまさみち しらずして／やみにまよひし つみびとも／くいてかへれる その日こそ／まことのひかり あふぐなれ (三節)

文学的、修辭的には、三六年版の方がすぐれていることはいうまでもない。第二節の冒頭の「あまつみそのにふ

きおこる／きよきみたまの かぜにこそ」は、三六年版の「めぐみのつゆの 置きわたす／みそらよりふく あまつかぜ」より仰々しい詞句といえよう。また、「くいてかへれる その日こそ／まことのひかり あふぐなれ」より、三六年版の「悔いてかへれる あしたこそ／うつらぬ日かげ あふぐなれ」の方が、文学的イメージとして、柔軟で、しかも落着いた表現になっている。しかし、そのことがそのまま、信仰歌としてプラスになっていることにはならない。というより、逆に、信仰歌という観点からは、初出『新撰讃美歌』の仰々しい表現の方に、作者の信仰の深さ、純粹度を読みとり得るように思われるのである。「あまつみそのに ふきおこる きよきみたまの かぜにこそ」という言葉が、三六年版の「めぐみのつゆの 置きわたす みそらよりふく あまつかぜ」より大袈裟と思われるところなどもそのうなのだ。しかも、三六年版の文学的イメージのよりすぐれた定着の方に、笹渕氏のいわれるような花鳥風月趣味生動のあとを確認できるのである。

さらに内容に至っては、指示されている聖句には相応しているが、「贖罪」の歌詞ではない。聖句は、「爾曹もと暗かりしが今主に在て光れり、光の子輩こどもらの如く行ふべし」（エペソ書五章八節、口語訳「あなたがたは、以前はやみであったが、今は主にあつて光となっている。光の子らしく歩きなさい」というのであつて、その意味は、キリスト者は、以前は滅びの子であつたが、今はそうでないのだから——主にあつて光となっているのだから、それらしく戦い努力せよというのである。⁽²⁰⁾キリストによつて救われた者の心構えといったものが説かれているのである。聖句に照応した歌詞は、まさに『新撰讃美歌』の示すごとく、「拯救 悔改め」というタイトルの方がふさわしい。罪人としての「いぶせきゆめ」や「こころのちり」などに、覚醒し——悔改めて、それらが一掃されて、「うれしき」「きよけき」身となることが、「贖罪」というタイトルに相応わしいとはどうしても思われないのである。

以上のように、三六年版『さんびか』は「贖罪」を大項目として、そこには多数の讃美歌群を収載していた。そのうちの日本人創作の三編は、『新撰讃美歌』では「贖罪」の部門にないものであり、またその部門の歌としては不適当な

ものであった。このことは、別所、湯谷、三輪などの、三十六年版編者たちにとって、「贖罪」なる教義が、彼等の精神を、根底から震撼させはしたものの、そのことは、彼らがキリスト教の教義を正しく受容していたこととは別であったという事で、そのことは繰返し述べたところである。

(2)次にいわば、日本人好みの主題の讃美歌の幾つかについて考えてみたい。

(国歌 三七〇番) 昭和六年版では「祖国 四一三番」となっている松山高吉の作品である。三十六年版と昭和六年版との歌詞には異同はない。

あまつみくらに ましまして／地にあるくを すべたまふ／主のおほまへに みめぐみと／みいつかしこみ ぶしをがむ／こゝろにことばに あふる、よろこび／いかにつつむべき(一節)

ここには、「あまつみくら」「おほまへ」「みいつかしこみ」といった風の祝詞から採用した用語をもって、主の恩寵と摂理のなかにある世界が描かれている。また、「みいつかしこみ ぶしをがむ」という言葉のなかには、いかにも明治人らしい神と世界への発想をうかがいとられて面白い。

ゆきのはな咲く えぞ千島／椰子の果みのる 台湾も／そとはあだなく うちやすく／たみさいはひを たのしめり／うつくしきくによ このいはひの日よ／いかにしたはしき(二節)

この節には、いわゆる日清戦争勝利により獲得された新領土が、何のためらいもなく日本の発展としてうけとめられてい、その上にうちたてられた内外の平和がうたいあげられているのである。国家の姿勢への懐疑のない肯定のなかに、素朴な明治人のナショナリズムを看取し得るが、この一節には、讃美歌らしい面影は全く見当らない。このような題材を無理に讃美歌らしく装わなかったところに、国家主義とキリスト教信仰という、本来的に矛盾するものを、無邪気に併存させていた明治キリスト者、松山高吉の正直な姿勢を見出すことができるのである。

そらにそびゆる たかやまも／地にふすたにも みづえさす／はやしとともに みことばの／ひかりにあひて 果

をむすぶ／みやこひななべて 主をうたふこゑの／いかにうるはしき（三節）

歌い出しは、高崎正風作詞の「紀元節」（明二一・二）の冒頭、「雲に聳ゆる高千穂の」にヒントを得ていることはまちがいない。内容は、山、谷、林といったもので自然を代表させ、その自然が神の祝福をうけたものであるとし、それを讃美する人びとの声の美しさを讃えたものである。神の祝福が「みことばのひかり」と表現されているところには、前記した横浜公会以来の信仰箇条の一、二条にある聖書依憑が信仰の原理とされていたことを確認させるとともに、作者たる松山の誠実な信者としての態度をも読みとることができるよう思われる。

とはいえ、海老沢有道氏の松山の「讃美歌は奥野に比して多分に日本の色彩を持つて」いるという評語が妥当なものであることもいうまでもない。一節の「あまつみくらにましまして」と「地にあるくにをすべたまふ」、三節の「ゆきのはな咲くえぞ千島」と「椰子の果みのる台湾も」、三節の「そらにそびゆるたかやまも」と「地にふすたにもみづえさす」といった風の対比的表現法、各節を七五調のリズムで重ねつつ、終りを七八七音で結ぶ技巧などには万葉集の長歌あたりに範をとった手法を感じさせることなど、海老沢氏の言葉の一証左としてよからう。

要するに、松山の作品は、キリスト教信仰と日本的叙情とが適当に混和された日本的讃美歌の代表的なものであることができよう。同じく松山の作品、「わがやまのくにをまもり……」という、三六年版の三七三番、昭和六年版の四一三番、現行版の「母国 四一五番」が、日本のキリスト教社会において、人口に膾炙しているのも日本的讃美歌故の現象の一つといつてよからう。

ついでながら、三六年版中の original の作品の中にもう一つ、当時の唱歌「一月一日」⁽²¹⁾（千家尊福作、明二六・八）を模倣したものとして、三六年版の「定礎式 三九五番」、昭和六年版の「定礎式 一八七番」があることを添記しておく。別所の作詞だが、上述した松山作品より、一層模倣の痕跡は顕著である。

（結婚 三八〇番）昭和六年版の四三〇番、現行昭和二九年版の「結婚式 四三〇番」である。『新撰讃美歌』が

初出であり、『古今聖歌集』（聖公会）にも採用されている。

いもせをちぎる いへのうち／わが主もともに ゐたまひて／ち、なるかみの みむねになれる／いはひのむしろ
祝いわしませ（一節）

いまし御前みまへに たちならび／むすぶちぎりは かはらじな／やちよともに たすけいそしみ／まご、ろつくし
主につかへん（二節）

あいのいしずゑ かたくすゑ／へいわのはしら なほくたて／かみのみめぐみ つねにおほへば／さいはひいへに
たえざらなん（三節）

きよきいもせの まじはりは／なぐさめつきず おもにをも／たがひにわかち ともにになひて／よろこびす、め
主のみにち（四節）

以上は三六年版の歌詞だが、昭和六年版と現行版においては、第四節のみ若手の修正がほどこされている。

きよきいもせの まじはりは／なぐさめとはに つきせじな／世のおもにをも ともにになひて／よろこびすすめ

主のみにち（六年版）

きよき妹背の まじはりは／なぐさめとわに 尽きせじな／重荷もさちも 共にわかちて／よろこび進め 主のみにち（現行版）

この変化の部分が大変面白いのである。というのは、三六年版、昭和六年版の段階では、共に慰め合い、重荷をわ
かちあうことになっているが、現行版に至って、夫婦は、相互慰藉、重荷分担と共に、幸福をもわかちあうべきもの
とされているところに、結婚観の歴史を辿ることができ、讃美歌の史料的价值をも見出すことができるのである。さ
て、『略解』には、「日本の教会で愛唱され、結婚式になくはならない歌になっている」と記されている。⁽²²⁾

神の恩寵のもとに、神に感謝しつつ、相互慰藉と重荷分担によって、人生行路を辿ろうというこの讃美歌の内容

は、封建的氣分の濃厚に残存していた当時の日本において、キリスト教的結婚觀に基くものとして新鮮な感動を誘發するに十分であつたろう。また、教義的な煩わしさをもたないだけに、それが平易な大衆性として、愛唱され続けたのもあろう。ということは、厳格な教義としてよりも、日本人としてうけとめられ易い倫理——ここでは結婚倫理——として消化されている、いわゆる日本の讚美歌の一つがこれであつたということにならうと思う。

(家庭 三三三番) 「家庭」という主題は、嘗ての家族主義国家日本に住んでいた者にとって最も取扱ひ易いものであつた。そのせいもあつてか、「国歌」同様、日本人創作歌は、三編の多きを数えるが、そのうち、現行版に採用されているのはこの一編だけである。昭和六年版の四三三番、現行版の「家庭 四三四番」で、三六年編者の主要スタッフの一人、湯谷の作詞である。三版とも、字句の異同は全くない。昭和六年版、ならびに現行版の編集委員会も修正の必要を認めない程、宗教性、文学性、大衆性の各点において、欠点を認めなかつたのであろう。「略解」が、「その單純平明な作風は、うたい易い曲と相俟つて、日本のキリスト教家庭に迎えられ、彼の作としては最もポピュラーなものとなつた」とあるのも、それを裏づけるものといえよう。

「すべての家族と偕に神を信じて喜べ」(使徒行伝 一六章三四節)をモチーフとしているが、この聖句に作者自身のクリスチャンホームの体験が甦り、おのずから詩句をなしたという感が深い。

みかみをち、と あがめまつりて／つかふるいへの そのたのしきよ (一節)

うからはらから したしみむつび／すべてをわかつ そのうれしきよ (二節)

あさなゆふなに いそしみはげみ／みさかえあれと よろこびうたふ (三節)

霜が^{しも}はてし うき世^よにすめど／とこ世のはるの こゝろこそすれ (四節)

クリスチャンホームの楽しさ (一節)、一族の交わりの楽しさ (二節)、クリスチャンホームにおける朝夕の、神を讚美する楽しさ、(三節)、冷酷な世間におけるクリスチャンホームの永遠の楽しさ (四節)、といった風に、

クリスチャンホームの楽しい気分が、時間的、空間的な諸側面から、漸層的に、極めて自然にもりあげられつつ、うたいあげられているのは、先にも一寸触れたように、クリスチャンホームにおける、作者の信仰生活の告白的要素に裏づけられていることを物語っているものとみてよからう。ともあれ、クリスチャンホームの楽しさ、喜びというのが、異質性を強調されることなく、日本の伝統的な家族主義の思想の枠のなかにおいて、柔軟に受容され、消化された、典型的な日本の讃美歌の一つとなっているのである。

（親睦会 三八六番）『新撰讃美歌』には、「親睦会」という項目はなかった。それが、三六年版において、はじめて新設されたのである。ところが、三六年版においてその部門に収載されている五編とも、original 即ち日本人の創作となっているのである。であるのに、昭和六年版においても現行版においても、これらから一編も採用されておらず、その項は、すべて翻訳讃美歌によって埋めつくされているのである。信仰歌としての適性に欠くものとの、それぞれの編集委員会の判断あつてのことであろう。さて、この五編のうち四編は、春夏秋冬と季節を追い、残る一編が雑という、歌集の基本的部立に則っているのである。こうした編成、ならびに作品群が、三六年版を嚆矢としていることは、この発案、作者ともに、別所、湯谷、三輪といった編集スタッフであつたろうと推定してよからう。笹渕氏が三六年版『さんびか』の特色を花鳥風月趣味とみたのは、このあたりに根拠をおいての発言のようにも思われる。

ひがしのそらは ほのぼのと／のぼるあさ日に あけゆけば／はなのほひに つゝまれて／かすみし月も しらみけり（一節）

うぐひすひばり こゑたかく／御神みかみののりを うたふなり／やなぎさくらは いろきよく／主しゅのみさかえを よそふなり（二節）

ひとつつみたまを うくる身は／をとこをみなの わかちなく／おいもわかきも もろともに／いざやうたひねす

めがみに（三節）

第一節が春の朝の風景、第二節が春の鳥、春の植物にうかがわれる神の姿、第三節が、老若男女ひとしく神を讃美しようという呼びかけ、などという内容によって、一編が構成されているのだが、その整然たる形式、古語の自由な駆使による柔軟な七五調のリズム、花鳥風月の世界を貫通する神の存在といった諸点に、日本的讃美歌の諸要素が尽くされているといつていい讃美歌である。このキリスト教的神の存在する花鳥風月の世界という文学世界は、モチーフたる聖句「視よ、冬すでに過ぎもろもろの花は地にあらはれ鳥のさへづる時すでに至れり」（雅歌 二章一一節、一二節）を、見事に文学化しているといえる。その意味で、日本的讃美歌としての傑作とはいえるものの、そのことが信仰歌としての欠点と評価されて、やはり同質の性格をもった他の四編とともに、後来の讃美歌集に入集されずに終ったのであろうと思われる。

（献堂式 三九八番）献堂式の部における、original の作品が四編もあることは、当時、新しい土地に、次々と会堂が建設され、その時々、記念として制作されたものが採録されたからであらうと思われる。この讃美歌は、昭和六年版、昭和二十九年版の何れにも採用され、前者では一九一番、後者では二〇九番となっている。これも『新撰讃美歌』を初出としているが、原作者は今もって不明である。『略解』によると、明治二八年ごろから、『新撰讃美歌』の歌詞改訂が始まり、この歌は主として湯谷磋一郎が担当したとのことである。⁽²⁴⁾ 三六年の歌詞は、その『新撰讃美歌』の「三九番 神の教 献堂」の面影をほとんどどめていず、それにしたがって曲までも一変している。そのために、この二つを原詩とその修正と判定できたのは、指示されている英文タイトル“Within Thy temple, Lord, my peace”が、同一であることだった。これが、『歴代志下』七章一五節に基づくと思われることは、三六年版に“2 Chron. 7: 15”とあることによる。三六年版には、さらに「我この処の祈禱に目を啓き耳を傾けん。」というこの節全体の日本語訳も付記されている。

さて、『新撰讃美歌』の原詩は、三十六年版に比較して、献堂の趣旨を表現したものとしては、たしかに舌足らずであり、拙劣でもある。以下『新撰讃美歌』の歌詞をかかげる。

かみのみやのため やすきをねがふ／いつくしむともよ めぐみあれな（一節）

ひたすらにいのる このおほみや／かぎりなくさかえ いややすかれ（二節）

したしめるものよ みやのために／こゝろをあはせて ともにいのれ（三節）

かみなるエホバよ さ、げまつる／このみやによりて さかえあれな（四節）

この傍線部分のみ、三十六年版に痕跡をとどめている。次に、三十六版の歌詞を記しておく。

主よいままへに さ、げまつる／みとのにへいわを みたしめたまへ（一節）

ゆたけきみめぐみ あふれいでて／ときはにかきはに 世にながれよ（二節）

主のみののため きよきとと／こゝろをあはせて ともにいのらん（三節）

主よいまよりのち このみとのを／みこゝろのまゝに もちるたまへ（四節）

湯谷の手の入っているという三十六年版は、一節は、新会堂への平和の願い、二節は、新会堂より恩寵の溢れ出ることの願い、三節は、新会堂での心を一にした祈りへの決意、四節は、全節を要約して、会堂を神の御旨のままに用い給え、という願いがうたいあげられていて、措辞内容ともに、豊富適切、かつ、整然調和という評語を下し得るものとなっている。そこには湯谷の文学的才能、古典的教養とともに、明治キリスト者の信仰の成長深化も確認できるのである。

昭和六年版では、二節最終部分の、「世にながれよ」が、「世をうるほせ」と変っているだけである。現行版もまた、その昭和六年版と比較して四節の「みこころのままに」が、「みむねのまにまに」に改められているのみである。湯谷の修正が創作に近いものであり、それが、宗教性、文学性、大衆性という面において、讃美歌として優秀であつ

ただけに、後の編者たちが、再修正の手を加えなかったのも当然であつた。

要するに、平和、恩寵、祈り、御旨というキリスト教信仰の要諦が、献堂の心として、整然とおさめられている点に、明治キリスト者の、誠実な信仰の所在を確認できる讃美歌といふことができよう。

以上、日本人の生活、あるいは生活感覚のなかに生きて働らくキリスト教信仰を素材とした讃美歌群が、日本人キリスト者の内部に潜流する、日本人のナショナルな感覚と併存するキリスト教、倫理としてのキリスト教、伝統的意識の枠のなかにおさまったキリスト教、花鳥風月趣味と混和したキリスト教、日本人的誠実さに裏づけられたキリスト教、という、日本的キリスト教の性格と情緒とをうたいあげるといふ特色をもつことで、三六年版において、多数収載されたのであつた。ところが、その日本の讃美歌という風土性の故をもって、この中の多くが後続の讃美歌集に採用されないという結果が生まれたのであつた。

(八) (まとめ)

以上、要するに、各教派協力の明治三六年版『さんびか』が、日本における讃美歌集の「一応の完成」であるという定説の上になつて、その三六年版について、編成と内容との二側面から、検討を試みた。その際、編成については四点、内容については二点に焦点を絞つて考察した。

先ず、編成の問題において、第一に、三六年版において、「贖罪」が大項目として設定され、一二編ものの歌を列挙し、そのなかの三編が日本人の作品であるといふことは、編者たちによつて代表される明治キリスト者のキリスト教の新鮮な教義への衝撃と関心とを物語つたものとみてよからう。第二に、昭和六年版以後、「教会」「永生」と題された大項目が、三六年で「戦闘の教会」「勝利の教会」とされていることは、明治キリスト者の熱烈な伝道志向、神の国建設志向の反映と読みとつてよからう。次に第三の、三六年版の「信徒の生涯」なる大項目の讃美歌

が、教義的側面の濃厚な信仰生活のみに限定されている問題である。これは、横浜公会の信仰諸則に発した、各派の信仰箇条に則った主題の讃美歌が、信仰生活の第一義的なもののそれらとして、「礼拝」、「聖父聖子聖霊」（『「神」』、「戦闘の教会」（『「教会」』）、「贖罪」という大項目に一括されたことを前提としていた。即ち、そのようなものは信仰箇条主義ともいふべき分類法がここにも働いて、信者の信仰意識をも、教義的側面の強弱による分類を行わしめ、その結果がこのような讃美歌群を集録させたのであった。筆者は、そこに形式主義的嚴格主義的儒教思想の基盤の上に形成された明治キリスト教信徒の信仰の姿をみるのである。第四に、昭和六年版では、「雑」という大項目に一括されているような讃美歌群が、三十六年版では「特撰」という大項目の名のもとに集められていることである。ここにも、明治キリスト教徒が、信仰生活に対しても、儒教思想の残痕たる、公私の別を明確にするという意識による分類法が機能して、その私的性格の濃厚なものを、「雑」の部門に収録させたのであらうと思う。そして、「礼拝」、「聖父聖子聖霊」（『「神」』）、「戦闘の教会」（『「教会」』）、「贖罪」という大項目には収載できなくとも、信仰生活における公的なものともいふべき側面を残存させていると考えられる讃美歌群を、「特撰」という部門に列举させたのであった。明治キリスト者の儒教主義的まじめさというものを、ここにもうかがいとることができるのであった。

次に、内容たる歌詞の問題であるが、「贖罪」の部門にある日本人創作の讃美歌が、三編とも、「贖罪」というタイトルにふさわしいものとはいえないということである。しかも、それらを、あえて「贖罪」の讃美歌と銘打ったところに、誤解の上に成立した点があったものの、「贖罪」という教義への明治キリスト者の深刻な衝撃の様相を察知させることに注目したい。次に日本人の生活なり生活感覚に無理なく受容される主題、例えば「国歌」とか、「家庭」とか、「親睦会」などというものをうたった讃美歌群は、伝統的倫理、感覚と混和した、いわゆる日本的讃美歌といっているものとなっていた。それらは、風土性に侵潤されている程度が濃厚であればある程、信仰歌としての欠陥を露呈した。三十六年版収載の日本人創作讃美歌の多数が、後続讃美歌集に不採用となった第一原因はそこにあった。

つまり、三六年版『さんびか』は、その編成においても、歌詞においても、これまで異国の宗教であったキリスト教の教義に、国と人間との変革を目的として、ひたすら、全身心を燃焼させてのめりこんでいった明治キリスト者の全体像を髣髴として思い浮はせるものがあるのである。換言すれば、厳格主義的、倫理主義的、教条主義的——往々にして教義の誤釈の上になつていたが——であつたとともに、伝統的情緒性、自然崇拜的傾向をも混在させていた、明治キリスト者の、キリスト教受容の実態を反映した性格のものであつたと結論できるのではないかと思う。

〔註〕

- (1) 『日本の讃美歌』（香柏書房刊 昭和三二年五月）二八、五九ページ。
 - (2) 『浪漫主義文学の誕生』（明治書院刊 昭和三三年一月）四一六ページ。
 - (3) 別所梅之助執筆「讃美歌小史」マクネヤ、別所梅之助共著『改訂讃美歌物語』（警醒社刊 昭和八年七月）「讃美歌小史」の部の一四四ページ。
 - (4) (2)と同書、四一六ページ。
 - (5) (2)と同書、四三一ページ。
 - (6) 三六年版『さんびか』の編集委員の氏名は次のようなものであつた（同書「序」による）。
- 「ろ、石原保太郎（和田秀豊）ろ、稲垣信（湯谷磋一郎）い、ジー、オルチン（メリー、アイ、グリーン）ほ、ゼー、エル、カウエン（デー、エス、スペンサー）は、エツチ、エツチ、コーツ（桜井成明）い、小崎弘道（湯浅吉郎）ほ、ビー、エー、デビー（エム、ビー、マデン）（メーテル、イー、ヘギン）に、ダブリユー、ビー、バアシレー（ヘレン、ユー、バアシレー）（エー、エー、ベシネット）に、藤本伝吉、ほ、別所梅之助 ろ、ティー、エム、マクネヤ、い、三輪源造
- い、組合教会 ろ、日本基督教会 は、メソヂスト教会に、侵礼教会 ほ、基督教会（委員の姓名は五十音順に従ひて排列せり。このうち石原保太郎、稲垣信の二氏は、諸事既に整ひ、正に本書を発行せんとする際、日本基督教会の選挙により、和田秀豊、湯谷磋一郎の二氏に代りしものとす。十二名の委員を以て版權所有者となすの規定なるが故に、代表者の更代を附記すること此の如し）
- 「事業の多くは主査たる別所梅之助、湯谷磋一郎及び書記デー、エム、マクネヤ、三輪源造の四氏の手になりき。而してトニツク、ソーファアーを附したるはオルチン氏な

- (1) と同書、七六ページ
 (8) 山本秀煌『日本基督教会史』（日本基督教会事務所刊 昭和四年一〇月）一二六—一二七ページ。
 (9) 高橋虔『宮川経輝』（比叡書房刊 昭和三年六月）一七一—一七二ページ。
 (10) 高木王太郎編『本多庸一先生遺稿集』（日本基督教興文協会刊 大正七年一月）三八七ページ。
 (11) (8) と同書、二五ページ。
 (12) 「この集を大別して三部とす。第一部は適宜の項目のものと普通の讃美歌を収め、第二部はや、こみ入りたる曲または讃歌隊の用ゐるものを、第三部は頌、讃詠、使徒信条、十誡を載せたり。明治三十六年版『さんびか』序。現行昭和二十九年版讃美歌では、「信仰の生活」という大項目の中の「救贖」というのが、三十六年版、九年版の「贖罪」と同内容である。」
 (13) 日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌略解 前編 歌詞の部』（日本基督教団出版部刊 昭和二年十二月）一三五ページ。
 (14) 山谷省吾、高柳伊三郎、小川治郎編『増訂新版 新約聖書略解』（日本基督教団出版部刊 昭和四年一月）二七二ページ。
 (15) 座談会「『天地を創りし神』と『天地の神』と」『国学院大学日本文化研究所報』一〇巻二・三号 昭和四八年六月。

- (17) 『北村透谷』（福村書店刊 昭和二年七月）九一、九二ページ。
 (18) (16) に同じ。
 (19) (15) と同書、五六六ページ。
 (20) (15) と同書、五七一ページ。
 (21) 「一月一日」「年の始めの例として終なき世のめでたさを／松竹たてて 門ごとに／祝う今日こそ 樂しけれ（一節）」。
 「初日のひかり さしいでて／四方に輝く今朝のそら／君がみかげに 比えつつ／仰ぎ見るこそ 尊とけれ」（二節、岩波文庫版『日本唱歌集』）。
 三十六年版「定礎式 三九五番」六年版「定礎式 一八七番」別所梅之助作「いまもむかしの ためととて／ふとしくたつる みやばしら／そのいしずゑの 根をふかみ／するけふこそ うれしけれ（一節）」。「いへてふいへは さはなれど／世にすてられつ 世をすてつ／吾家なき子の やどりにし／たつるみやこそ たのしけれ（三節）」。「みつばよつばの とのづくり／おばしまたかく あらずとも／あまつみとのの おもかげを／うつすみやこそ たふとけれ」（四節）。
 (22) (14) と同書、二三八ページ。
 (23) (14) と同書、二三九、二四〇ページ。
 (24) (14) と同書、一三一ページ。